

「調和」概念の変遷

—— カント〈判断力の美学〉前史に関する一考察（2） ——

木村 覚

『判断力批判』（一七九〇年）において、I. カントは美しいものを、趣味判断を下す能力のもとで解明した。すなわち、何かを美しいか否かを識別する趣味判断の根拠が、構想力と悟性という二つの認識能力の調和 —— 「自由な戯れ」（5, 217; 5, 256）—— の内に求められ、またこの調和が、判断力における両者の調和として考えられることになる。趣味の能力はこのようにして、諸認識能力の関係を反省する判断力、すなわち悟性や理性と並ぶ上級認識能力のひとつである直感的判断力の内に、その原理が、超越論的意図から論究されることになるわけである。

こうした趣味の位置づけは『判断力批判』においてはじめてあらわれた。それ以前のカントもやはり、趣味や創作（詩作）を論じるなかで「調和」の概念を自らの美学的思考の内に据えてはいた。ただし、原理的な問いのともなう趣味論を明確に展開しはじめた七二年以降の人間学講義録のなかに残された議論から、とくにこの論点を仔細に検討してみると、そこに垣間見えるのは紆余曲折する彼の思索の痕跡である。

本論考は、本誌前号において筆者の行った、判断力の美学（『判断力批判』の「判断力の超越論的美学」を指す）の成立前史に関する考察の続編をなすものである。今回はとくに、「調和 Harmonie」「一致 Übereinstimmung」あるいは「適合的 gemäß」等の概念をめぐるカントの議論に注目する。そこから明らかにしたいのは、調和のアイディアがどのような仕方で最終的に判断力における構想力と悟性の調和という考えへと至ったのか、その諸過程である。あらかじめ述べておけば、本論考はその端緒を、創作（詩作）に関する考察の内にみとめることになる。

さて、ここで主な考察対象とするのは、一九九七年に出版され、いまだ研究途上の資料と言うべき人間学講義録（アカデミー版カント全集第二五巻所収）である（その他、必要に応じて同時期の講義録などを参照することもある）¹。そこに残されている講義のノートは一七七二年から八九年までの時期

にまたがっている。それは議論の展開に応じて四期に区別することが出来る。すなわち、第一に、対象の現象と主観の感情との調和を論じる七二―七三年冬学期（取りあげる人間学講義はすべて冬学期に行われていた。以下「冬学期」の表記を省略する）の「コリンズ」「パロウ」、第二に、創作（詩作）において思考と感覚の調和を論じる七五―七六年の「フリートレンダー」、第三に、悟性と感性の調和を精神による統一として見る七七―七八年の「ピラウ」、第四に、判断力における構想力と悟性との調和を呈示した八八―八九年の「ブゾルト」である。また、第三と第四の間で、八一―八二年の「人間論」と八四―八五年の「ムロンゴビウス」には天才論の内部でカントが判断力を論じる部分のあることに注目し、そこでの判断力の位置づけを明らかにする。

1 現象と感情の調和（七二―七三年）

（a）直観と比較の判断力

人間学の講義が始まった七二―七三年の講義録「コリンズ」や「パロウ」には、カントが趣味の能力としての判断力をどのような仕方で論じようとしていたのかについて、興味深い考察の跡が見出せる。例えば次の筆記は、当時の判断力への考えを簡潔に示している。「趣味は感性的判断[力]である、しかし感官と感覚の判断力ではなく、直観と比較の判断力であり、この判断力は直観を通して快と不快を受けとる」（25, 177）。ここでカントは、趣味に関わる判断力は「感官と感覚の判断力」と区別するべきであり、そこには直観と比較の側面があるとする。この時期の「直観」概念に関しては、すでに本誌前号で論じたので詳細は省く。一点確認しておくべきは、当時のカントが、趣味を学ではなく批判の枠組でのみ扱うべきとし、直観なしに立てられる規則を厳しく退けていたことである。すなわち趣味は、外から与えられる一定の規則に従う能力ではなく、鍛錬を通じてしか形成されえないものに他ならなかった。さて、カントが「直観と比較の判断力」と呼ぶこの判断力の、とくに「比較」の概念に焦点を絞り、そこからこの時期の調和をめぐる考えを探ることにしたい。

まず、判断力の比較が何と何を比較するものであるのかについて問えば、次の筆記を参照する限り、現象と感情との比較であったと言える。「単に美としての美そのものについて、私は感情に従って判断することはまったくなく、感情と比較される現象に従って判断する。感官は感情に属するのであり、判断力は趣味に属する。従って、感情は非常に容易くもつことが出来る、というのも感官が感情に属するからである。しかし趣味は希である、なぜならば趣味に属するのは判断力だからである」（25, 178）。

ここに、判断者は美しいものを現象に従って、とくに感情と比較される現象に従って判断するとある。さて、この判断は趣味によって下される。それ故に、この判断において現象が比較される感情と、単に感官によって判断を規定する際の（容易くもつことが出来ると言われる）感情とは区別すべきである。カントは「単なる感じやすさと感動が感情に属する」（ibid.）と言い、感情のなかには趣味と相容れないものがあると考ええる。それだから「我々は趣味を感情と区別しなければならない。趣味〔の根拠〕は感覚ではなく、ただ事物の表象である」（25, 177）とも言うのである。

（b）感情と「感性の法則」との関係

ならば次に、美しいものの判断において現象が比較される感情の特徴を明らかにしたい。美しいものは、感性的直観を促進する。美しいものはその点から、快感情を引き起こす（「満足を与える」）ものである。また、感性的直観を促進するが故に、美しいものは感性の法則にかなうものでもある。「感性的直観を容易にするものは満足を与えまた美しい、それは主観的な感性の法則に適合的であり、諸認識能力を活動的にすることで、内的な生を促進する」（25, 181; cf. 25, 379）。ある客観的なもの（の現象）が主観的なもの（の感情）と比較されそこに調和が生じるとすれば、当の客観は感性的直観を容易にするものであり、従って「感性の法則」に適合し、快感情を喚起するものである。こうした点から「直観と比較の判断力」に「直観によって快と不快を受けとる」側面のあることが理解出来る。

次に「感性の法則」がいかなるものであるのかについて整理してみたい。ほぼ同時期の『感性界と知性界の形式と原理』（一七七〇年）に依拠するなら

ば、それが認識における二つの法則の内の一つであることが分かる。「認識は感性の法則に従う限り感性的であり、知性能力の法則に従う限り知性的つまり理性的である」（2, 392）。この論考においてカントは、感性界と知性界の二元論のもとで感性の法則に従う認識と知性的能力に従う認識とが別々に成立すると考えている。しかしここには、こうした感性の法則と趣味との関連は何ら示されていない。

この二つの法則は、七二年のものとされる講義録「フィリピ論理学」を参照すれば、カントが感性の法則を「完全性」の概念のもとで捉えていることが分かる。「客観的な論理的完全性は認識と悟性の法則との一致である。主観的な直感的完全性は認識と感性の法則との一致である」（24, 360）。そして「直感的完全性は、ただ私の趣味と関係をもつだけである」（24, 359）と言明することから明らかなように、この講義録ではカントは、感性の法則と認識の一致である直感的完全性を、趣味と非常に密接的な関係に置いている。

ここで「感性の根本法則」（24, 353）という考えを呈示し、そこからカントが趣味の規則を引き出そうとする点に注目したい。感性の根本法則は直観なしに存在するものではなく、あくまでも感性がもっている次の点に根拠を置く。「我々の感性は安定した活動状態にあり、また安定的なままできようと欲する」（ibid.）。「趣味の規則」（ibid.）を、カントはこうした「感性の根本法則」から引き出している。「この感性の〔安定的な〕活動を妨げるものはすべて、感性にとって不愉快だし快適ではない。このことから〔趣味の〕規則が生まれる。つまり、感性が対象を努力なしに把握し、その印象を容易に区別出来また感覚出来るようにするために、ひとは多様性のなかに対称性、調和や明晰性そして総じて理解しやすさを備えようと努める。従って、趣味は多様性に対照性、調和、軽さ、明晰さそしてあるものからその反対のものへの漸次的な移行を要求する。飛躍は感性を混乱させるのである」（ibid.）。客観のもつ多様性の内に、趣味は「対称性」「調和」「明晰性」などを求める。それらは感性的直観を楽にしました促進するものであり、それ故に感性の根本法則にかなっているからである。それが美しいものである。そこで生じる満足は、単に主観的でしかない感覚や刺激とは異なる。つまり、真に美しいものの場合、満足の根拠は感性の法則にかなう事物のあり方（「対称性」「調和」「明晰性」など）の内にいるからである。

以上から、対象の現象をこうした感性の活動にともなう快不快の感情（感性的直観を促す対象が感性の法則にかなって生を促進した結果として生じる感情）と比較すること、これがこの時期のカントの考える判断力（趣味）であると言うことが出来る。こうした考え方は、七〇年代後半と推測される講義録「形而上学Ⅰ」にも残されている²。故にこれは、少なくとも七〇年代の後半まで続いた一つの思考の傾向と言いうる。七二―七三年の段階で論じられるのは、対象の現象と判断する主観（とくに感情）との調和であって『判断力批判』のように主観の内なる諸認識能力の調和を反省する考えはここにはない。カントがこの調和に類比的なものを議論しはじめるのは、次に見るように七五―七六年の「フリートレンダー」からである。ただし、それは趣味論ではなく創作（詩作）論において展開されたものであり、また悟性と構想力ではなく思考と感覚との調和を扱うものとしてはじまる。

2 思考と感覚の調和（七五―七六年）

（a）諸認識能力の調和

P. ガイヤーは人間学講義録を分析した先駆的な論考のなかで、この時期に「調和」の概念が次のような転換をしたと捉えている。「美しい客観における我々の快は客観が誘導する構想力と悟性の間の調和的な戯れによって引き起こされ、また彼の論じるような状態は相応しい境遇にあるいかなる観察者においても誘導されることが正当に予期されうると七〇年代のなかば以降にカントは議論するようになる一方で、七二―七三年の講義録で彼は、美における我々の快はただ客観と我々の感性の法則との調和によって生じると主張している」³。

なるほどガイヤーの指摘する通り、七〇年代の半ばになると、カントは調和の問題を思考と感覚の調和として論じるようになる。そこから『判断力批判』以前の美学的思考を解明する鍵として「調和」の概念を省みた場合に、カントは「フリートレンダー」の時期に新しい一歩を踏み出したと言うことが出来るに違いない。『判断力批判』で悟性と構想力の調和をもって趣味判断の根拠を定式化する仕方の先駆的な形態がここに指摘することが出来るの

である。

ただし、この点に関して一つの異議が唱えられるかも知れない。すなわち、諸認識能力の調和を趣味判断の根拠とすることに関して、最も重要なものは『純粋理性批判』における図式機能の考察であり、それなしには『判断力批判』固有の超越論的な美学が生まれることはありえなかった、という異議である。もちろん、経験的直観と純粋悟性概念という互いに異質なものを媒介することによって認識を可能にする図式機能は、『判断力批判』においてカントが構想力（直観）と悟性との調和を超越論的意図から論じる際に不可欠のものであったに違いない。

とはいえ、批判期以前、人間学講義録で展開された美学的考察において、カントが諸認識能力の調和を論じていたこと、しかもその「自由な戯れ」に言及していることもまた、本論考の課題から鑑みて注目に値する点である、と筆者は考える。『純粋理性批判』において図式機能を解明するなかで、このような「自由な戯れ」が議論されることはない。図式機能が超越論的な考察にとって重要であることは間違いないとしても、この「自由な戯れ」に関する議論がすでにカントの手中になければ『判断力批判』のあの独自のアイディア、すなわち悟性の命令なしに判断力が構想力と悟性との調和をとくに「自由な戯れ」として反省するアイディアはなかった、と推測する余地はある。

（b）思考と感覚の調和的な戯れ

具体的に見ていきたい。先にも述べたように、この時期に諸認識能力の調和が議論されたのは、趣味判断ではなく詩作を論じる場であった。「思考と感覚の調和的な戯れが詩である。思考と感覚の戯れは主観的な諸法則の一致である」（25, 525）⁴。あらかじめ七〇年代半ばの心情諸力（あるいは諸認識能力）の調和をめぐる思考の特徴を指摘するならば、次のようになる。すなわち（1）思考と感覚の調和が対象となっていること、（2）「生の促進」もまたこの「戯れ」に関連づけられていること、（3）その戯れに関して「自由」の概念が付与されていること、（4）以上が趣味ではなく詩に関する議論のなかにあらわれていること、である。

（c）詩作における調和

心情諸力の自由な戯れ（の感情）が調和の考察の内に登場したことと、それが他ならぬ詩作の問題の内で取りあげられたこととは不可分に違いない。

「諸感覚は思考を促進しなければならずまた活気づけなければならない。活気づけるとは、強さ、明晰さ、直観を思考に与えることである。思考が感覚に順応する限り、詩人は思考の戯れを駆り立てる」（25, 526）。カントは詩を、感覚を通して思考が表現されるあり方という点から論議する。従って、感覚と思考の調和という点に詩人の抱える課題はある。「詩芸術では、詩人は思考と言語表現に大いなる自由を有していなければならないが、しかし戯れの調和という点では、彼はいかなる自由ももたない」（ibid.）。詩人は言語を巧みに扱うひとである。彼は感覚に訴える言語のリズムなどを用いて、それにさまざまな考え（思考）を引き合わせ「思考の戯れ」を求める。すなわち「詩人は音節の長短あるいは韻の使い手である」（ibid.）。彼はこれらの言語的表現によって、感覚に適合的な思考を促進し活気づける。詩のもつこうした特徴を、カントは感覚が思考に順応する雄弁と対比している。「思考と感覚のこの調和的な戯れが詩である。詩は調和的な戯れであり、その調和において思考は感覚の戯れに順応する。雄弁もまた調和的な戯れであるが、この場合感覚が思考に順応する」（ibid.）⁵。

こうした詩と雄弁の対比を『判断力批判』は受け継いでおり、類似の議論がある。ただし『判断力批判』の場合には、詩と雄弁は思考と感覚ではなく悟性と構想力の関係の内にある。すなわち、雄弁家の仕事は「悟性を合目的に働かせること」（と同時に、彼は自分が約束しない「構想力の楽しい戯れ」を与える）であるのに対して、詩人は「戯れつつ悟性に栄養を与えて、構想力によって悟性の諸概念に生氣を与えること」（5, 321）が仕事になる。以上の考察から推測出来ることは、趣味の問題として『判断力批判』において論じられることになる構想力と悟性の調和（とくにその自由な戯れ）は、まずあらかじめ創作（詩作）論の場で議論されたものがのちに移入されたものではないか、ということである⁶。

（d）「心情諸力の自由な戯れ」

次に、カントが「フリースレンダー」において、「自由な」戯れとして諸認識能力（ないし心情諸力）の調和を説明している点に注目したい。それは「生の促進」に関する議論の内にある。七二―七三年において「生の促進」は、感性的直観を楽に働かせることの内にあった。それに対して「フリースレンダー」での説明はこうである。「生の促進の感情は喜びもしくは快である。生は人間のすべての諸力と諸能力の自由で合規則的な戯れの意識である」（25, 559）。

「生」は、ここでは諸能力の「自由で合法則的な戯れ」の意識である。さて、この「自由で合法則的な戯れ」という表現のもつ内実をさらに明確にするために、次の論述を参照したい。そこでカントは「喜び」を「感覺的 *sensuell*」「理想的 *ideal*」「知性的 *intellectuell*」の三つに区分する。そのうえで、理想的な喜びは「心情諸力の自由な戯れ」に基づくとする。「喜びは感覺的、理想的そして知性的である。感覺的喜びは感官の喜びでありたやすくみとめられる。しかし、理想的な喜びはより多くの説明を必要とする。それは心情諸力の自由な戯れの感情に基づく。感官は我々の感覺的喜びを促進する諸印象の受容性である。しかし、諸対象が我々に向けて印象を形成するのではなく、我々が諸対象を心情の内で思い浮かべる限りにおいて、我々は諸対象を通して自分の心情諸力を扇動の内へもたらすことが出来る。それが理想的な喜びである。理想的な喜びはたしかに感性的ではあれしかし感官の喜びではない。詩、小説、喜劇は我々の内に理想的な喜びを生み出すことが出来る。それらは、心情が自ら感官の様々な表象から認識を形成する仕方に基づいている」（25, 559-560）。

注目したいのは「我々が諸対象を心情の内で思い浮かべる限りにおいて、我々は諸対象を通して自分の心情諸力を扇動の内へもたらすことが出来る」との部分である。対象を心情の内で思い浮かべることが理想的な喜びの条件である。そのことは、理想的な喜びを感官の喜びである感覺的喜びとわけ隔てる契機になる。なぜならそのことは、対象を媒介にして心情諸力に刺激を与えるからである。「対称性」などに美しいものを見出していたそれまでとは異なり、理想的な喜びを可能にするものに「詩、小説、喜劇」を挙げている

「調和」概念の変遷（木村）

点は、美しいものについての議論が、単に感性的直観と呼ばれていたものでは捉えきれない複雑なもの、知性的な側面を含んだものを対象とするに至ったことを示している。

さて、そのとき生じる戯れに、カントは「自由な」という形容詞を付加している。ここで自由とは、あくまでも「活気づける」こと、すなわち「生の促進」との関係の内にある。「心情諸力の戯れは、それが〔何かを〕活気づけるべき場合には、強く、生き生きとまた自由でなければならない」（25, 560）。ガイヤーによれば、これら「フリートレンダー」の部分は、心情の調和に対して「自由な戯れ」という概念が付与された最初の事例とも言えるものである。当時の「自由」の位置づけに関して、ガイヤーはさらにこう述べる。「しかしこの段階で、カントはすぐに、理想的な喜びの基礎である心情諸力の自由な戯れを、知的な喜びの基礎あるいは道徳性の基礎である「規則にかなう自由の使用」から区別する。直感的応答の他とは異なる特徴を保ちつつもなお道徳的判断をこの直感的応答に連関づけるのに、自由な戯れの一形式として直感的応答を特徴づけることが有用であるとはカントはまだ気づいていなかった」⁷。知的な喜びとは、道徳的なものに関連する快であり「規則に従った〔かなう〕自由の使用の意識」（ibid.）である。それは、規則の強制に阻害されずに規則に応じることを指す。なるほどガイヤーの言う通り、『判断力批判』で「構想力の自由」を「意志の自由」に類比的なものとして捉えるようには、カントはこの時期まだ「自由な戯れ」を道徳的なものと連関づけていない⁸。

3 精神と判断力について（七七一 八五年）

（a）精神の美としての悟性と感性の調和（七七一 七八年）

「ピラウ」（七七一 七八年）の時期になると「フリートレンダー」において示した「思考」と「感覚」の調和的關係を、カントは「悟性」と「感性」の關係と言い換えている。ここでまたもう一つ特徴的なことは、互いにとって異質なこの二つの能力の調和を「精神の美」の内に置く点である。「我々は悟性と感性の調和的な戯れを精神の美と名づけることができるようになる。美しい精神は悟性がそこにあることを、しかし感性と調和の状態にある悟性

「調和」概念の変遷（木村）

がそこにあることを思考する」（25, 759）。

悟性と感性との調和を思考する能力として「精神」を両者の間に置くことによって、諸認識能力に調和を与える能力の存在が浮かび上がってくる。「精神は他と切り離された能力ではなくむしろあらゆる能力に統一を与えるものである。悟性と感性あるいはよりよく言うならば構想力は、人間の能力である。これら二つの能力に統一を与えるのが精神である。それはまた人間の心情の普遍的な統一であり、あるいはそれらの間の調和である。精神はまた理念によって感性を活気づけることでもある」（25, 782）。

「活気づけること」はこれまでも「生の促進」をめぐる言及されてきた。カントはここで活気づける能力として精神を据える。なるほど『判断力批判』にも、こうした説明がある。「精神とは、美学的意味では心情の中で活気づける原理のことである。しかし、この原理がそれによって魂を活気づけるもの、すなわち、そうするためにこの原理が使用する素材は、心情諸力を合目的に活動的狀態へと置き移すものであり、言い換えれば、みずから自分を維持し、自分でそのために諸力を強めるような戯れへと心情諸力を置き移すものである」（5, 313）。

次の論述に明らかのように「ピラウ」は、この「美学的意味」における精神が天才という概念と連関することを示している。「精神は天才とちょうど同じ意味であり、そしてさらにその事柄を一層よく表現している」（25, 782）。精神は、芸術作品を制作する一種の産出的能力である。それはまたとくに次の特徴をもつ。「何か新しくまた新しいものの原理と見なされうのような我々の才能の使用というものがなければならない。この原理はしかしすべてののひとに見出されるものではない、そしてこれが精神である」（25, 783）。精神は天才の能力であり、とくにその新しいものの原理を担う能力である。天才は強制的に外から規則を与えられるものではなく、むしろ新たな規則を与えるものである。その点で天才は自由でなければならない。「天才は規則の指導や強制なしの自由である。規則の指導による腐敗というものに左右されることは天才に反している。…… 天才は規則の新しさの原理である、なぜなら天才はいわば新たな規則を与えるからである。それだから天才は古い規則の指導を受けることはないのである」（25, 784）。そしてこの規則の新しさは、これまでの分析を省みるならば、悟性が感性（構想力）との調和の狀態

にある場合にみとめられるもののはずである。天才を構想力と悟性の関係の
内に見る『判断力批判』での位置づけ（5, 316）と同型のものが、この時期
にすでにカントの内にあったのである。

（b）天才の要件としての判断力（八—— 八二年）

今度は、以上のように創作（詩作）論に調和の考察が集中する一方で、こ
の時期のカントが判断力という概念をどのように扱っていたのかについて省
みることにしたい。指摘するべきは、判断力を趣味と直接的に関連させて（同
義のものとして）考察する痕跡が、七二— 七三年にはあったものの、その後
ほとんど見あたらないという点である⁹。ただしその一方で、八—— 八二年の
人間学講義録「人間論」において天才の概念を検討する際に、カントは判断
力に触れている。とくに興味深いのは「天才には感覚、判断力、精神そして
趣味が必要とされる」（25, 1060）といった表現である。天才という能力に
関する判断力の位置づけは、例えばこうである。「我々は天才を樹木に喩え
ることが出来る。天才は判断力に根を生やしてのびる」（25, 1062）。この
ように判断力は天才という樹木の「根」の位置にある。この判断力の役割は、
端的に言えば「検閲係」である。「我々は判断力を、構想力〔想像力〕の産
物を真理に適合するようにしうるもののすべてであると理解している。とい
うのも、構想力〔想像力〕は自らが結実するどんな場合でも、しばしば自然
から逸脱するからである。従って、判断力は天才の検閲係であり、天才にし
つけを受けさせる」（25, 1060）。判断力は天才との関係のなかではそれを
いさめる「天才の検閲係」であり、より具体的に言えば、構想力が自然から
逸脱することを防ぐ能力である。これは『判断力批判』第五〇節に示される
論述、つまり天才を判断力ないし趣味と対比させる論述と類似しており、そ
の先駆的な思考の跡と言える。この第五〇節において技術は、天才に関わる
場合には精神豊かな技術となる一方、その天才が判断力（趣味）に従っての
み、すなわち構想力の自由が悟性にかなった場合にのみ美しい技術（芸術）と
なる、と言われている。

『判断力批判』のように悟性との関係からではないにしても、ここでカン
トが判断力を、構想力の逸脱を真理に即して制限する能力と規定する点は、

「批判的能力」としての判断力固有の役割とその重要性を示している。判断力は、それによって天才に必要な能力のなかでも精神と並ぶ本質的なものと位置づけられる。「天才のなかで本質的なものは、精神あるいは諸表象の系列をもたらす創造的な能力と判断力あるいは批判的な能力である。精神なしの判断力や判断力なしの精神は何ら天才を形成しない」（25, 1061）。ところで、こうした判断力と精神あるいは判断力と天才の対比は、イウディキウム（判断力）とインゲニウム（機知、才能）を並置し、後者に対する前者の役割を論じた古代の修辞学にその淵源を探ることが出来る¹⁰。E. R. クルツィウスに依拠すれば、古代ローマの修辞学者M. F. クインティリアヌスにとって「ingenium [機知] はしたがって invention [創意] の領域に属する。才知にとむ創意という資質はしかし、それが判断力と対をなすのでなければ欠点と化する。ingenium [機知] と iudicium [判断力] はしたがって対立する場合もありうる」¹¹。両者の具体的な関係に関しては他にも、例えば文体上の悪しき気取りについて「精神（ingenium）が判断力（iudicium）を欠き、善きものらしき外観に欺かれる場合には常にそうであり、これは雄弁におけるすべての欠点のうち最悪である」¹²とクインティリアヌスは論じている。

（c）精神と判断力の区別（八四―八五年）

以上のように「人間論」では、自然から逸脱しないように構想力を真理へと適合させる判断力が示された。ただし、そこで判断力と趣味を一つのものとみなすことなくむしろ個別に挙げていたことが示唆的なように、カントはまだ趣味にこのような判断力の行為と類似性をもつ点を見出してはいなかった。七〇年代はもちろん『純粹理性批判』以後も、一七八四―八五年の「ムロンゴビウス」での次の論述に明白なように、人間学講義録において、悟性と感性（構想力）の調和を見出す能力は精神であって、一方、趣味の能力としての判断力に、カントがその役割を想定することはなかった。「精神は悟性と結びついた構想力である。しかし趣味は感性と結びついた判断力である」（25, 1313）。『判断力批判』の第五〇節にあるような「趣味は、判断力一般と同様に、天才の訓練（ないし訓育）である」（5, 319）といった考え、

要するに、趣味のなかに判断力の「検閲係」と同様の能力を捉える考えは¹³、この時期にはまだあらわれておらず、趣味は相変わらずただ感性との結びつきにおいてしか扱われていないのである。

4 判断力における悟性と構想力の調和（八八―八九年）

悟性と構想力の調和を反省する能力として判断力を捉える考えは、ようやく『実践理性批判』（一七八八年）の第二部「純粹実践理性の方法論」にあられる。すなわち、我々に認識能力を感じさせる判断力の活動は、徳ないし道徳法則に従う思考様式に「美の形式」を与える。その際「諸表象能力の調和の意識」が主観的に生まれ「我々はそこで我々の全認識能力（悟性と構想力）が強化されることを感じる」（5, 160）¹⁴。

また、人間学講義録に戻るならば、八八―八九年の「ブゾルト」でカントは「人間論」にあったものと類似的な、天才を樹木に喩える比喻とともに、趣味を感性的判断力と呼びまたこう位置づけている。「ひとは趣味を感性的な判断力と呼びうる。それはつまり構想力を悟性に適合的であるよう制限する判断力である。天才は根をのばす、それは判断力である、あるいは梢をのばす、それは感性である、あるいは花になる、それは趣味である、あるいは実になる、それは精神である」（25, 1496）。

ここもやはり天才を論じるところである。先に挙げた「人間論」での論述と同様に、判断力は構想力の逸脱を制限する能力である。さらに、ここにきてようやく明確に、判断力は構想力を悟性との適合のために制限する能力として、またそうした趣味の能力として位置づけられたわけである。カントがこの適合の内に端的に両能力の「自由な戯れ」を見ていたか否かについては、明示的な記述はなく確定出来ないとしても、ここに示されたものが『判断力批判』へと実を結ぶ思考の一要素であると推測することは可能である。

結語

以上から次のような結論を引き出すことが出来る。すなわち、『判断力批判』における「判断力の超越論的美学」が成立するための一つの重要な要素として、創作（詩作）論のなかで展開されていた諸認識能力の「調和」「自由

な戯れ」というアイディアが最終的に判断力の概念の内に与えられたことを挙げる事が出来る。対象（の現象）と主観（の感情）との調和から、さらに主観の諸能力間の（とくに自由な戯れとしての）調和が論じられるようになり、またそれが判断力において反省される調和として捉えられるようになる過程は、趣味の能力を『判断力批判』に結実するような仕方で論じるために必要なものであったに違いない。

注

- ¹ 引用の訳出にはアカデミー版カント全集を参考にした。引用末の丸括弧内に巻数と頁数を付した。引用内に付した原文の一部は、表記のまま転載してある。
- ² 「知性的な快は普遍的に満足を与えるものである、しかし感性の普遍的〔一般的〕な法則に従ってではなく、悟性の普遍的な法則に従ってである。知性的な快の対象は善い。確かに、美しいものもまた普遍的に満足を与える対象であるが、それは感性の普遍的〔一般的〕な法則に従ってである」（28, 253）。
- ³ P. Guyer, “Beauty, Freedom, and Morality: Kant’s Lectures on Anthropology and the Development of His Aesthetic Theory”, in *Essays on Kant’s Anthropology*, ed. Brian Jacobs and Patrick Kain, Cambridge University Press, 2003, pp. 141-142.
- ⁴ 「主観的な諸法則の一致」という表現は注意を要する。普通に読めばこの一致は相異なる主観的な諸法則が一致することと考えられる。ただし、様々な主観的な法則を列挙し異なりつつもそれらが一致する面もあるといったことをカントが省察しているところを見出すことは出来ない。むしろ、客観と主観の一致の内に美しいものを捉えていたカントのこれまでの考え方に読みを従わせて、ここを、思考と感覚との戯れは「主観的な諸法則（現象との）一致」であるとの趣旨を説く部分と捉える方が妥当であると筆者は考える。
- ⁵ 七七-七八年の「ピラウ」にはこう記されている。「雄弁は、悟性の理念を感性によって活気づける芸術である。詩芸術は、感性の戯れに悟性によって統一を与える芸術である」（25, 760）。
- ⁶ 六四年の『美しいものと崇高なものの感情に関する観察』の覚え書きには、趣味を考察するのに次のような「創作的 *dichtend*」側面が重視されている。「心情諸力が単に受動的ではなく、活動的で創作的である限りにおいて、趣味は精神的で理想的なものとと呼ばれる（最も洗練された感情が外的感覚によってではな

「調和」概念の変遷（木村）

く、そのために創作がなされるところのものによって動かされるとするならば」(20, 117)。これは、創作（詩作）と趣味（判断）が初期のカントのなかではそれほど厳密には区別されていない面があったことを示唆するものである。七二-七三年「コリンズ」の次の記述からは当時のカントが趣味の能力の内に機知や着想をみていることが分かる。「学説はどのようにひとが美しいものを生み出すべきかの教えである。もし美学が学説であるとするならば[そんなことはありえないわけだが]、ひとは機知的であることや着想をもつことを学ぶるのでなければならぬことになる[が、それは不可能なことである]」(25, 194)。

⁷ Guyer, *ibid.*, p. 147.

⁸ 本誌前号で述べたように、すでに道徳性のなかに美しいものの根拠を置く考え(25, 195)はカントのなかにある。とはいえ、美しいものと道徳性との関連について、『判断力批判』での「類比」を媒介としたような考えは示されていない。

⁹ 「人間論」では、美しいものを判定する趣味とは異なり、感性的判断力は魅力に関わる(25, 1099)との筆記が残されているけれども、これは概念規定の不安定さを感じさせる。

¹⁰ Cf. J. Engels, “Ingenium”, *Historisches Wörterbuch der Rhetorik*, Gert Ueding (Hrsg.), Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1998, S. 392.

¹¹ E. R. クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』(一九四八年)南大路振一、岸本通夫、中村善也共訳、みすず書房、一九七一年、424頁。

¹² クルツィウス、前掲書、438頁。クインティリアヌスの論考には、他にも、こうした創意 *invention* の不正をただすものとして判断力を捉えているところがある。Cf. M. F. Quintilian, *Institutionis oratoriae*, III, iii, 5.

¹³ カントは『判断力批判』のなかで「美しい技術には、構想力、悟性、精神、趣味が必要されるだろう」(5, 320)という表現を残しており、先に挙げた「人間論」で天才には感覚、判断力、精神、趣味が必要と言われていたのとは異なり、ここでは(直感的)判断力は趣味の内に含まれていると考えられる。

¹⁴ ただし、このときカントの念頭にあるのは、趣味判断と言うよりは目的論的判断であり、ライプニッツの昆虫観察が例として挙げられていることから分かるように、合目的的な秩序があらわれるある種の事柄の観察である。